

# 『師守記』にみる中世葬祭仏教

——墓・寺・僧の相互関係を中心として——

伊 藤 唯 真

## 一

中世仏教の一特色は、葬祭仏教化が全般的に進展し、その後の仏教の性格を強く規定したことにある。仏教と葬祭との結びつきはもとより古代においてもみられるところであるが、墳墓・寺庵・僧尼の三者が、死者ないし祖先への追善回向を契機として、相互に連関しあうという構造的な濃厚にもつに至り、またそのことによって仏教が一段と社会各層に根を下したのは、実に中世に入ってからのことである。

中世葬祭仏教にみられる、このような構造的連関についてはすでに注目せられ、なかでも近時は墳墓・造塔・納骨・寺庵・惣堂などの問題が取上げられ、遺物・施設・慣行などの考古学的民俗学的分析が進められ、かなりの成果が挙げられている。

しかし方法的反省を加えるならば、中世という時点での解明には多くの点で困難があり、研究対象もしばしば分散させられがちとなり、かつ方法も考古学的あるいは民俗学的解明のどちらかに偏しがちで、一面的な把握にとどま

っている場合が少なくないのに気づくのである。例えば墓地・石塔が取上げられても大抵は考古学的な遺物解明か、民俗学上の墓制の問題としてだけで処理されてしまうことが多く、祭墓の実態などの復元的考察や、墳墓・墓塔・供養塔が占める葬祭仏教における構造連関での位置・機能などについての考究が欠落している。

葬祭仏教のもつ構造的連関性を重視するならば、墳墓と寺庵とを仏教的葬祭の場として、造塔・納骨・追善供養などの儀礼慣行を通して、死者・祖先への追福回向が展開していく様相を、まず具体的に把握する必要がある。このような立場からすれば墳墓・石塔などは重要ではあるが、それだけを単独に取扱ってはいは葬祭仏教の特質を明かすことにはならないのである。従って、種々の点で限界のある考古・民俗上の中世葬祭資料に先んじて、墳墓や祭墓のことはもちろん、造塔・祖先追善儀礼など多方面の事項に示唆ぶかい記述がある文献史料に拠って、先ず中世葬祭仏教の様態をさぐり、その上で考古・民俗資料を見直してみるべきであろうと思われる。

このような観点から中世の仏教的葬祭の分野を改めて考えてみようとするのが私の基本的立場であるが、このことに多少とも資する史料として、ここで取上げたいのは中原師守の日記である。

中原家は、平安時代以降、子孫あいついで大少外記となり、また清原家とならんで明経道の博士家として、世に知られた家柄である。師守は大外記・明経博士師古を祖父、大外記師右を父とし、兄に大外記・明経博士師茂をもち、自らも大外記となり、また博士に任ぜられた南北朝時代の人である。その日記『師守記』には師茂・師守兄弟が修した仏事が比較的細かに記されている。

この『師守記』に書かれた仏事関係の記事から、墳墓での立塔およびそれへの僧侶の関与、追善仏事の時処および形態、亡魂追善における墳墓と寺院との供養場としての在り方、墓参儀礼にみられる被弔者の世代的族的範囲、追善に関する諸仏事およびそれらから知られる聖霊、先祖観などが窺われる。そこで以下『師守記』によって如上の諸点を考察し、以て十四世紀中葉の上官層における葬祭仏教の展開を覗いてみたい。

『師守記』の仏教記事で最も多いのは諸忌日の追善仏事であるが、なかでも記事の集中しているのが師茂・師守兄弟の両親の中陰・月忌・遠忌に關してである。

父師右（法名顯恵）が死去したのは康永四年（二三四五）二月六日であるが、この年の日記は二月六日まで欠け、同七日の記事も前半が汚損されているので、葬送の模様は残念ながらよくわからない。しかしそれ以後については大略次の通り知ることができる。

二月九日には、籠僧空一房の斡旋で、中陰中の日仏および七躰仏（初七日不動、二七日薬師、三七日釈迦、四七日観音、五七日地藏、六七日普賢、七七日阿弥陀）が前者は一貫文、後者は三貫文で絵師に発注された。空一房は中原氏嫡流が「管領」する樋口寺の長老である。またこの日、籠神が葬送のときと同じ路を辿って、墓地のある靈山に渡された。延慶、正和の葬儀には行なわれなかったが、この度は「流例」たるによってなされたという。

ついで十日に、前漏刻博士定夏に「御着服日次」「墳墓御参日次」「御墓石塔以下日次」のことが諮られ、勘文が進められることになり、また仏事での誦経始めは翌日、法事始め（法華曼荼羅供養）は三月十二日と決められた。石塔や釘貫のことは空一房の差配に委ねられていたが、十一日に新物錢三貫文余が彼に渡された。

十二日は初七日。師右がなくなった南向四間を道場として、空一房招請による長伯寺長老の説法、七躰仏・法華經・二十五三昧一座（前夜に修す）の供養、故人筆写法華經の転読などがあり、諷誦文は師茂、師守、師躬、故師右妻室、師守姉の五通であった。墓参は師守らの場合早且に行なうのが常であったが、この日は故人の妻室が衰日に当たったので、陰陽師の忠言で、師茂、師守は墓参しなかった。しかし説法以後、籠僧はじめ僧尼衆、青侍善寛、菅原国兼、国尚ら参会者は靈山に赴いた。墓所では「梵網經十重・宝篋印多羅尼・光明真言・阿弥陀經・錫丈并念仏等」の所作

があつた。また、この日、門に物忌札が立てられ、夜に入つて撤去された。札は三尺ばかりの楣板で、上に大日梵字が書かれ、その下に物忌と記されていた。なおこの札は二七日にも立てられたが、延慶や嘉暦（祖母）の例にならない、それ以後は廃されている。また坂非人が来て施行のことを申入れたので、「先々四十九日下行之由」が約されている。いわゆる非人布施のことである。

十九日の二七日早旦に、家君の師茂は籠僧二人（空一房・了心房）、叔父師躬（師右弟）、弟師守らとともに初めて墓参した。「今日為吉日之由、陰陽師計申」したが故である。墓前での所作は前にのべたのと同じであつた。この日、師茂、師守らの母・故師右の妻が空一房を戒師として剃髪出家し、顯心と号した。二七日の仏事も説法以下初七日とほぼ同じである。

二十六日は三七日。墓参、仏事とも二七日と大差ないが、この日はとくに六条および四条尼衆が内々で墓参している。

二十九日に、「可立石塔於墳墓日次」が陰陽師に尋ねられ、三月六日との注申を得た。三月四日の四七日には、師守・師躬・籠僧は墓参したが、家君師茂は物忌によつて参らなかつた。

三月六日、石塔が建立された。師守は物忌のため墓地へ行かなかつたが、次のように書き留めている。

今日依為吉日、被立石塔并釘貫等、於御墓一事□上空一房沙汰也、早旦家君黒染狩衣有御同車籠僧二人<sup>（師茂）</sup>空一房并少外記師躬等、参御墓給、予依物忌不参、及数剋調御墓、<sup>上人下部</sup>調了、立石塔置釘貫、其鉢殊勝々々云々、石塔有

梵字彫入、又釘貫四方柱并中柱等被書梵字、釘貫首五色採敷也、先於御墓所作、宝篋印多羅尼・光明真言等也、立石塔了後所作、宝篋印多羅尼・梵網十重・光明真言也、次阿弥陀經・念仏等有之、其後家君以下御帰宅、

さきに石塔・釘貫の祈物銭が空一房に渡されてから略一ヶ月が経っている。籠僧が単に中陰中の仏事を修するだけでなく、墓塔の建立にまで関与していたことが、この記事から知られる。実際、空一房は石塔の注文から、自分の下

部を使って墳墓を整え、墓石を立てることまで行なっている。恐らく石工とも関係があったのであろう。墓塔の形態まで書かれていないが、当時圧倒的に多かった五輪塔か宝篋印塔かであろう。高さは三尺三寸であった。<sup>③</sup>塔には梵字が刻まれ、釘貫の三方柱や中柱にも梵字が書かれていた。立塔作業の前に、宝篋印陀羅尼・光明真言が誦されているが、墳墓には恐らく墓じるしとして仮卒塔婆が立てられていたであろう。「及数剋、調御墓」とあるのは、この仮卒塔婆の処置をも含めて、土墳の形状などを調整したことを意味していよう。そして釘貫の内側には、初七日から四七日までにでき上った、名号や法華経、浄土三部経を抄写した卒塔婆が、東北隅から南向けに立て置かれた。因みに土墳上に墓じるしが設けられないとき、この供養の卒塔婆が墓じるしを兼ねるようになる。

新らしく立てられたこの石塔の供養は、五七日の三月十一日に行なわれた。邸内での五七日の仏事が終ってから、師茂・籠僧二人、師守・師躬らが墓前に参じた。ほかに弁公・黒法師丸・菊若丸・時衆二人、青侍友阿・家国・善覚・国兼・国継・国尚・延兼・有能・竹夜叉らも参入した。空一房が墓前に円座を敷いて供養の儀を執行したが、「先例毎度於御堂有此儀、今度依無御堂、於御墓前有供養儀」とて、御堂で行なわれるのが通例であった。延慶・正和のときには堂があり、ここで供養の儀があったわけであるが、この堂とは墳墓に近接して建てられていた墓堂のことをいうのであろう。七七日の三月二十五日の条には「小堂」とある。この日、墓前で尼衆の一時念仏があったが、「先例近（切）僧衆六口招請、於小堂有一時、今度無堂之上、依無知音僧、如此」くなくなったのだという。中原氏の墓地にも近くまで二十五昧系の墓堂があったわけである。従って、この墓堂が現存すれば石塔供養もここで行なわれた筈である。五七日のときも、石塔供養が終ってから、空一房・了心らによる梵網十量・宝篋印陀羅尼・光明真言などの唱誦があり、ついで時衆の尼僧・青侍らが一時念仏を行なっている。

五七日の諷誦文は、いつもの師茂ら五人のはかに、空照房・友阿・善覚・師茂女房らのがあった。友阿は師頭・師古・師右・師茂ら四代の家君に仕え、とくに師右には三十ヶ年も近侍した齡七十の老人であったが、浄土信仰を持ち、

師右の臨終の善知識をつとめ、五七日には浄土三部経および名号を卒塔婆面に書いて故師右追福の作善とした。<sup>④</sup>この供養卒塔婆は新造の墓塔の傍らに立てられたことであろう。

因みに立塔とそれにつづく石塔供養の時期は必ずしも一定していない。例えば師右の妻願心の三尺石塔が供養されたのは百ケ日であったし、<sup>⑤</sup>師右の伯父師富の子師枝のときは十三回忌に「新シク立石塔、元無之」という具合であった。しかし家嫡の場合には師右の如く五七日が標準的であった。中陰の塔婆供養が五七日に行なわれるのが通常であったことは、南北朝時代成立の『神道集』に「其後從初七日始、七日宛御訪怠不給、三十五日塔婆供養過云々」とあることにも徴せられる。

三月十二日、代々の例に任せて法事が修せられ、空一房が用意した法華曼荼羅の供養があった。このときの師茂の願文については別の箇所で触れるであろう。この日、師茂・師守らは墓参しなかったが、故人の妻願心尼は陰陽師の指示で初めて墓参した。

同十八日の六七日仏事は例の如くであり、師守の姉が始めて墓参している。満中陰は三月二十五日、墓参、仏事も例の通りであるが、諷誦文は十二通もあり、いつもの顔ぶれの他に安芸入道円源、兵部大夫入道了円、源元国、惟宗家国、清原国兼、故師右妹経仏房らがそれぞれ追善の誠を捧げている。

満中陰以後の追善仏事については項を改めるが、この四ヶ月後に妻願心が死去しているので、その中陰中のことについて師右の場合と比べ、特徴的な事項若干を述べ添えておこう。

願心尼は康永四年八月二十三日、酉剋に亡くなった。葬送は、文永の師願母・嘉暦の師右母の例にならって、一向僧が沙汰した。亡骸は亥剋に四条坊門の持藏堂宝持寺に秩され、さらにその夜のうちに霊山へ送られ、土葬に付された。竈神も師右の時と同様に霊山へ渡された。そして尼衆が籠ることになった。

初七日は悪日によって邸内で修せず、ただ僧衆が宝持寺で仏事を修し、かわって墓参するだけであった。願心尼の

中陰では重日その他の理由で忌日が引上げられることがあった。例えば二七忌が九月三日、七七忌が十月十日に変更され、正当の九月六日、十月十二日には靈供が供えられ、師守などは光明真言六百反を唱えて菩提を祈っている。中陰の仏事は師右のときとはぼ同じであるが、法華経は卒塔婆面に書写され、追善の卒塔婆として墳墓上に立てられた。なお七牀仏は師右のときが使用された。師右のときには早旦に行なわれた墓参も、顕心尼の際にはほとんど仏事が終ってからになっている。また、これは師右・顕心両中陰仏事に共通することであるが、各中陰忌日の前夜には必ず二十五三昧講が修され、忌日当日にその供養が行なわれている。中陰忌日と二十五三昧講との関係は、『本朝文集』に収められている南北朝以降の諷誦文によってもよく窺える。

さて、以上のことから、中原家の墓地は靈山に設けられ、管領する寺院に樋口寺があり、家君など男性がなくなつたときにはこの寺の住僧が葬送、立塔を取扱っていたこと、また女性亡者のときには持蔵堂や六条の時衆尼が深く関与していたこと、陰陽家の説が葬祭にも支配的であつたこと、総じて時宗の影響下にあつたが、仏事には密教的要素が濃厚に在していたこと等々が知れる。

京周辺の葬送としては古くから鳥辺野<sup>⑤</sup>、船岡西野<sup>⑥</sup>などが知られていたが、靈山もまた葬地であり、早くから念仏僧が住していた<sup>⑦</sup>。国阿が永徳三年（一三八三）靈山寺に入り、阿弥陀堂を立てて正法寺と号してより、靈山時衆、靈山派が出現するが、師右葬送当時の靈山寺は天台系寺院で、靈山法印朝観が住していた<sup>⑧</sup>。中原師右、師茂の流れはこの靈山寺よりも持蔵堂など時衆の方と関係が深かつた。顕心尼の葬送だけでなく、百ヶ日を迎えて建立した石塔もまた「一向僧沙汰也」であつた<sup>⑨</sup>。この一向僧とは真宗のことではなく、時宗のことである<sup>⑩</sup>。時宗は地藏信仰を持ち、多くの時宗道場には地藏菩薩が安置されていたというが、『師守記』に出てくる持蔵堂は時として地藏堂とも書かれているので、持蔵堂宝持寺も時宗寺院であつたとみてよいのではなからうか。いずれにしろ、後でものべるように女性先亡者の追善供養は持蔵堂、男性の場合のそれは樋口寺でというように、分担がはっきりわかれていたことは興味

深い。

### 三

師茂、師守兄弟の両親すなわち願惠・願心聖靈の追善仏事は、仏者の常例通り、七七日のあと百ヶ日・年忌・月忌などがつとめられるが、『師守記』自体に散佚があるため、願惠聖靈の月忌記事五十四回、同じく願心聖靈の分四十回のほかは、次の通り出ているにすぎない。

#### 先考願惠聖靈

百ヶ日忌（康永四・五・七・十七）、第一回仏事（貞和二・二・六）、第三回仏事（貞和三・二・五）、遠忌五年（貞和五・二・六）、遠忌十九年（貞治二・二・六）、遠忌廿一年（貞治三・二・六）

#### 先妣願心聖靈

百ヶ日忌（貞和一・十一・卅）、三回忌（貞和三・八・廿三）、遠忌（貞和五・八・廿三）、遠忌（貞治六・八・廿三）

（以上年忌の表記は『師守記』に従う、以下同じ）

右の百ヶ日忌、年忌などを中陰の仏事と比較すると、説法・諷誦・転読・誦呪・展墓といった順序次第については基本的にかわらないが、規模、結構、作善その他の点で多少の相違がある。特に目立つのは仏事が修される場所である。中陰には七躰仏を本尊として南向四間出居で行なわれていたが、七七日後の月忌始めからは邸内の仏堂で営まれている。願惠百ヶ日忌は盛大であつたらしく、説法以下の仏事が焼飯のあつた常出居で行なわれたが、願心百ヶ日忌は持仏堂であつた。また一周忌以後の年忌は願惠聖靈、願心聖靈ともに持仏堂で行なわれている。従つて持仏堂の安置仏が仏事の本尊となるが、絵像その他も同時に用いられることがあつた。また、両親の場合だけに限らないが、



文字通り遠忌というにふさわしいような後々の年忌になると、家君の師茂が持仏堂で仏事を修すると、同じ邸内（南対屋<sup>⑨</sup>）に居る弟の師守も霊供を供えたり、また家君の仏事と並行して、自室へ僧尼を請じて、自ら光明真言を唱へて菩提を弔うことがあった。<sup>⑩</sup>

さらに、追福作善への参加者の範囲が拡大し、念仏系の作善が増えているのも特徴的である。例えば、墓塔のまわりに立てる木製卒塔婆への写経が家君ら近親者から青侍家僕にまで及び、同族ではあるが家系の異なる人からも書き送られてくるようになる。<sup>⑪</sup> また忌日の前夜に二十五三昧が行なわれることは前にものべたが、そのほかに百万念仏、一夜別時念仏、七昼夜別時念仏、三百万遍名号などが修されている。<sup>⑫</sup> 家君が二十五三昧を修するや、師守方では別時念仏が行なわれるという例が多い。

さきに持仏堂で行なわれる両親らの遠忌仏事には、その堂の安置仏のほかに絵像も本尊とされたとのべたが、この絵像のことにも注目したい。

貞和二年二月六日条に「今日先人（師主）被修御一廻仏事、自昨日御持仏堂莊嚴、安置本尊阿弥陀木像・如意輪木像并先人以下御影懸之」とあるが、師

守の理解によれば本尊としての師右らの御影も懸けられた。同日条によれば阿弥陀像は本持仏堂の本尊であり、如意輪像は内持仏堂から移したもので、故人の影像もこれとならんでまつられたわけである。この影像は、妻顕心が夫顕恵の七七日に図写したもので、彼女の諷誦文には「奉図写来迎三尊絵像一鋪并先人御影以下、右、今日相当顕恵聖霊七々日忌景、令図絵弥陀三尊、所奉廻施彼追善也」と出ている。<sup>⑬</sup>

また「弥陀三尊并先考・先妣・覚妙等形代」、「三尊聖容并二親・覚妙等影像」、「三尊聖容并形代等」と書かれたものもある。ここにある形代という表現は、影像を精霊の依代とみていたことを示す明徴であって、きわめて注目される。さて、これらの表記は、弥陀三尊像と諸聖霊の影像とを一具にしたものの存在を伝えているから、顕恵・顕心・覚妙らの追善に資すべく、後人おそらく師茂によってつくられた三聖霊と弥陀三尊図を一体にしたものもあったのである。

う。

さらに「阿弥陀三尊在祖父文影像」<sup>⑤</sup>「阿弥陀三尊絵像在二親形像」<sup>⑥</sup>といった表現もしてある。前者は祖父師古遠忌、後者は師右遠忌五年の仏事に関する記事の一部で、これらによれば、明らかに聖霊の肖像が画きこまれた阿弥陀三尊絵像であったことがわかる。これから推量してみても、さきの貞和二年二月六日条の記事には阿弥陀三尊云々の文字こそないが、願恵らの影像を伴う弥陀三尊像であったと考えて間違ない。

貞和三年二月の願恵第三廻仏事に懸けられた「阿弥陀三尊絵像二親御形像」<sup>⑦</sup>は、「絵師備前法眼宗円去々年絵師了智去年他界」<sup>⑧</sup>とあるように、宗円によって新らしく画かれた三尊絵像であった。この記事から去々年即ち康永四年（貞和元年）の願恵満中陰の「来迎三尊絵像一鋪并先人御影以下」が、中陰日仏・七晝仏の絵師了智によって画かれたものであることがわかる。また願心の諷誦文に「来迎三尊」と書かれていることから、聖霊影像をもつ阿弥陀三尊が来迎の図柄であったことが知れる。このことは暦応三年七月十六・十七日の箇所の紙背文書に「敬白 請諷誦事（略）奉図画 阿弥陀三尊像并聖霊真容（略）尽副存生之真容於来迎之霊□結解脱之縁、奉縫落飭之遺髪於新仏之宝冠云々」と書かれていることに徴しても明らかである。かかる作品が現存するか否か寡聞にして知り及ばないが、もし類似のものが遺存すれば絵画上また信仰史上、さらには中世葬祭資料上まことに貴重である。

『師守記』のほかにも、やはり南北朝時代にこのような作例のあったことが他の文献から窺えるので、中原師茂家の独創作ではなかったようである。例えば『本朝文集』巻第七十三の「為先考卜部兼豊入道五句忌修冥福願文并諷誦文」に「敬白、奉讃嘆阿弥陀如来三尊并薬師地藏二鋪、右一鋪者、幽霊当五句逆善、図仏菩薩於生衣、写三人真影、留祖父母於同座云々」と書かれている。

次に願恵・願心両聖霊の月忌であるが、百ヶ日までの月忌は籠僧によって丁重につとめられているが、一周忌が過ぎると持仏堂に二親御影のある三尊聖容絵像を懸けて小善を修する程度で、墓参もあまり行なわれなくなる。

顯心月忌では、四条坊門の持藏堂で「三尊聖容（在二親）」絵像をまつり、師茂・師守らは靈供を送るだけで、仏事は尼衆らが形の如くに修するという場合が多くなっている。また顯惠月忌でも簡略化が進んでいるが、家君だけでなく、弟によっても追善が行なわれるようになっていいる。すなわち追福作善の主宰者が多元化しているのが、特に一周忌以後の持徴である。例えば顯惠月忌では兄弟それぞれが僧尼を招いて仏事を修し、弟は家君主宰の仏事へ靈供膳を進め、自らは光明真言六百反程度を唱える程度にしている。弟の師守が靈供を準備し、光明真言を唱えるだけという場合も多い。

一周忌以後の墓参では、盆と遠忌のそれだけは不可欠のようであるが、月忌は展墓よりも追福の小善に重点が置かれているようである。一周忌のことを「御はての事」というが、この「はて」とは主として墓参の果てることであろう。実際に、それまでこまめに行なわれていた墓参も一周忌が過ぎると、あまり行なわれなくなる。一周忌以降、墓地の方はかへりみられず、やがて荒廢にまかせられるのに対し、寺院・仏堂での追善は比重を増してくるのである。

以上、師茂・師守らの両親である顯惠・顯心聖靈の遠・月忌をみたが、では二親以外ではどうかであろうか。やはり『師守記』現存記事によっていかなる俗的範圍の聖靈の遠・月忌が師茂ら兄弟によってつとめられているかをみよう。追善供養の対象靈とその仏事年月日をまとめると次のようになる。

曩祖羽州殿（師元、久安元年五月廿日歿）

遠忌（康永四・五・廿）、遠忌（貞和二・五・廿）、遠忌（貞和三・五・廿）、遠忌（貞和五・五・廿）、遠忌（貞治四・五・廿）、遠忌（貞治六・五・廿）

肥後殿（師頭）

遠忌（暦応二・十一・十一）、月忌（康永四・三・十一）、遠忌（貞和一・十一・十一）

祖父（師古）

月忌（康永四・三・廿一）、遠忌（康永四・六・廿一）、月忌（貞和一・十・廿一）、月忌（貞和一・十一・廿一）、遠忌（貞和三・六・廿一）、達忌（貞和五・六・廿一）、遠忌（貞治六・六・廿一）

祖母（嘉曆三年四月五日歿）

忌日毎月儀（曆応二・七・五）、十三回忌（曆応三・四・五）、遠忌（貞和三・四・五）、遠忌（貞治三・四・五）、月忌（貞和一・十一・五）、遠忌（貞治四・四・五）、遠忌（貞治六・四・五）

親惠（建武四年六月廿六日歿）

遠忌（康永四・六・廿六）、大三回（曆応三・六・廿六）  
（顯心）

字和（顯心）御乳母、元德二年五月十三日歿）

十三回忌（康永一・五・十三）

覺妙（師守姉、建武四年七月廿一日歿）

三年忌（曆応二・七・廿一）、十三回忌（貞和五・七・廿一）、遠忌（貞治三・七・廿一）、遠忌卅一年（貞治六・七・廿一）

觀心（師興母、觀応二年六月三日歿）

十四年忌（貞治三・六・三）

師茂女房母（延文三年六月六日歿）

七ヶ回忌（貞治三・六・六）

全心（師守息女、延文五年六月八日歿）

遠忌五年（貞治三・六・八）、月忌（貞治五・十・八）、八年忌（貞治六・六・八）

弥阿弥陀仏（師守乳母、康安元年四月十八日歿）

遠忌五年（貞治四・四・十八）、七ヶ年忌（貞治六・四・十八）、月忌（貞治六・五・十八）、月忌（貞治六・六・十八）、月忌（貞治六・八・十八）

師守孫（康安一年六月二十七日歿）

七ヶ年遠忌（貞治六・六・廿七）

真経房（師茂女、貞治元年二月三日）

一周忌（貞治二・二・三）、第三回遠忌（貞治三・二・三）

師守女房（貞治二年六月十二日歿）

五年（貞治六・六・十二）、月忌（貞治六・八・十二）、月忌（貞治六・九・十二）

観照（師茂末子、貞治四年九月廿三日歿）

第三回忌（貞治六・九・廿三）

覚法（貞治五年五月十五日歿）

一回忌（貞治六・五・十五）

右の諸霊のうち、曩祖の中原師元の聖霊は本来家君がまつるべきものであり、事実師茂が中原氏管領の樋口寺で善事を修しているのを、師守は書き留めているに過ぎない。ただ師茂が善事を修しえず、霊供を供えるだけであつたとき、師守は光明真言百反を唱えて・菩提を祈つた。年一回の達忌だけでなく、月々に弔われたのは、当然のことながら祖父母・父母、それに家君師茂一家と師守自身の家族など近親先亡者である。師守は女房・子女のみならず、乳母の霊をも丁寧に供養し、かなり後まで月忌をつとめている。肥後殿（師顕）以後の諸霊は月忌がつとめられているが、時が経過するにつれ、世代の離れていく聖霊はもとより、そうでなくとも、月忌はしだいにやめられ、遠忌だけになつてしまふようである。

曩祖師元の仏事は樋口寺で行なわれたが、曾祖父師顕、祖父師古の場合も同様であり、空一房が仏事をとり行なっている。家君などが物忌みで憚りあるときに限って師茂邸の持仏堂で説法以下があったが、ほとんど樋口寺で行なわれた。

これと対蹠的なのが女性霊の場合である。ほとんど四条坊門の持蔵堂で遠忌がつとめられている。例えば姉寛妙、家君女房母堂らの遠忌はいずれも四条坊門の持蔵堂で行なわれ、もし何かの都合で修されなかったときには尼衆が師茂邸に來臨している。また母顯心の乳母・宇和の霊は聖雲房寺で供養されている。

このような男女による寺院の区別は、すでに師右とその妻室の仏事をみたときに触れたところであるが、近世の男女別に檀那寺がわかれる、いわゆる半壇家制的なものの先行形態とみられはしないかと興味がある。

#### 四

さて、右にみた如く師茂・師守兄弟は、曾祖父師顕・祖父師古・父師右の三代と、七代さきの師元との遠忌を毎年修するのであるが、師元は曩祖羽州殿として仰がれている。師元は『中原系図』に

師遠

摂津守修理左京城使圖書頭隠岐守  
博士主計頭大外記正五位上局務  
天文密奏、大治五年卒、六十一

師安

局務博士主計頭  
大外記正四位下

師清

直講少外記從五位下

女子

師元

般倉院別当出羽守掃部頭  
大炊頭博士大外記局務  
為家嫡賜師業文書以下、久安元年卒

師憲

山僧相宴

阿闍梨

僧安寛

阿闍梨

と出ているように、師遠の跡を嗣いで家嫡となった人物である。そのあとに師尚、師重、師兼がつづき、師頭に至っている。そして師茂によると、一門の始源からすれば師右は正嫡十三代の跡を稟け、師茂は十四代の家督を受けているという。即ち故師右の法事始めである法華曼荼羅供養の際の師茂の願文に

敬白

奉供養法華曼荼羅一鋪

奉讀嘆妙法蓮華經一部八卷・開結二經・心阿弥陀經

右、尊像妙典、為訪先考大外史之菩提、所演供養也、爰幽靈仕前燭後燭之明主、歷儒士錄事之頭要、情思、曩祖

安寧天皇第三皇子磯城津彥命之芳躅也、閑案、旧臣(有象)天祿礼部侍郎之余胤也、已稟正嫡十三代之跡、夙夜之勤節無

私、朝夕之拝趨在公、就中当初応洛殿讀書之清撰、依為論訴決断之惣掌、心府磨素白、都鄙之名望、天之所許、

世之美談者歟、加級亦登四品之位、外史之規模、何事如之、師茂為彼長子、受十四代家督、拜儒職兼大倉令、叙

五品之正上、於家以此齡少登是階之例、雖恥不肖之質、非知王沢之恩乎、(凡性)分雖拙、深依孝行、不離膝下、隨

左右送居(諸之勉力)、幽儀去仲春上旬之天、被侵病痼、泉壤隔玄寢閑、今季春中旬之候、逢五七代謝之日、慈慕之紅

涙染(秋)別離之哀傷銘肝、夫五十一年之星霜夢中空、一生涯之光華幻間榮也、不如唯勵慇懃之追善、偏為亡魂之資

糧、仍迎今日、奉供養曼荼羅并妙法蓮華經、捧梵席為仏事始、然者過去尊靈十惡之霧霽、望満月於三明殿之夜台、

七宝之花忽薫、開覺藥於八德池之春浪、乃至界内界外、(同力)聞妙蓮之句、三乘五乘、齋嘗仏果之味、敬白

康永四年三月十二日 弟子正五位上中原朝臣師茂敬白

とある。文中の「已稟正嫡十三代之跡」や「受十四代家督」を『中原系図』や『尊卑分脉』などと対応させると、次のようになる。

春宗<sup>1</sup>——有象<sup>2</sup>——致時<sup>3</sup>——師任<sup>4</sup>——師平<sup>5</sup>——師遠<sup>6</sup>——師元<sup>7</sup>——師尚<sup>8</sup>——師重<sup>9</sup>——師兼<sup>10</sup>——師頭<sup>11</sup>——師古<sup>12</sup>——師右<sup>13</sup>

『中原系図』や『尊卑分脉』によれば、春宗からさらに勝良<sup>大宰少典從五位下</sup>に遡ることができるが、『尊卑分脉』には「家系図或不載之」とあり、『中原系図』も「元祖之相承、本源之余流、未得伝来正説、尤可尋討哉」とのべているように、元祖についても正説がなかったようである。しかし師茂家所伝では右にみたように、初代は春宗とされていたことがわかる。

そこで祖先祭祀の上で興味深いのは、師茂・師守らがこの初代を先祖としてまつらず、第七代の師元を鼻祖とすることである。そもそも中原氏は「号一流之分流之輩繁多」<sup>⑤</sup>であり、事実、師元の兄の師清の系統も繁栄している。従って師元は分流の一祖であったわけであるが、師遠のあと家嫡となったので、師茂ら子孫にすればあくまで正嫡であった。しかし師茂らにとって、先祖とは初代春宗ではなく、実質的には流祖たる第七代師元がそれであった。

ところで『師守記』の追善記事によれば、この流祖と曾祖父・祖父・先考三代との中間にある諸祖は追善供養の対象とされていない。従って墓参もなく、子孫の記憶の外へ追いやられる命運をもっていた。子孫がどのような族的範囲で聖霊の遠忌・月忌等を修するかはすでにみてきた通りであるから、ここでしばらく展墓を受ける聖霊の範囲を眺めておこう。展墓の機会は月忌・遠忌・盆などであるが、月忌などところがって、特定の聖霊だけではなく、ひろく墓参される盆の場合を取上げてみてみよう。

康永四年七月十四日には師茂が虐病に罹っていたので師守と青侍らが墓参したが、その墓は先考師右<sup>(顯惠)</sup>墓、親惠墓であった。この親惠墓には師守の姉覚妙の骨が納めてあり、師守はこの三聖霊を意識して墓参している。その後母顯心をはじめ死亡者が増えていたので、十六年後の貞治三年七月十四日には、師守は師茂ともども先考顯惠墓、先妣顯心墓、親心墓、覚妙・親惠聖霊等墓に参っている。このとき顯心墓には師守の妻の遺骨、また親惠聖霊等墓には師茂の妻の母の遺骨が奉籠されていた。師守の妻は前年六月に亡くなり、師茂女房母堂はこの年六月に七回忌を迎え



ているから、一周忌または七回忌を期して、(願心墓) 願心墓、(師守妻) 観恵墓に納骨したものであらう。「彼御墓師豊母儀骨籠置之間」

「家君女房母堂骨被置之間」などあるから、願心墓などには奉籠穴が設けられていたことがわかる。またこの日の夜、師守は薬王寺へ行き、妻と乳母の遺骨を鐘樓の間に預置しているが、分骨納置の一形態として注目される。

なお墓前での所作は、両親の墓では日中礼讃など、(師顯) 観心、(師亡) 覚妙、(師顯) 観恵、師茂女房母、師守女房らの諸聖靈に対しては阿弥陀経、念仏などであったが、両親の墓と肥州殿と祖父聖靈らには水向けがなされた。

墓参の対象がこのように石塔墓を中心に、世代的にも曾祖父以降に限られているとすると、曩祖羽州殿以降曾祖父以前の代々諸聖靈の供養はどうなるのであろうか。全然無視されるのか。盆の供養に関しては貞治六年七月十四日の次の記事が参考になる。

先於先考・先妣御墓前各一時(願惠調声) 次於先妣御墓有阿弥陀経・念仏、故女房骨(籠)置彼(御墓)故也、次於観心聖靈

墓有一時、次於祖父御墓阿弥陀経一卷、念仏等有之、奉為列祖聖靈等也、(先々無之、自去年有之、尤可然) 次於壇上覚法聖靈分一時

有之、又観照聖靈分阿弥陀経・念仏有之、又覚妙聖靈予姉観恵聖靈分阿弥陀経各一卷・念仏等有之、所作以前、

於二親御墓家(君)予向水、其外祖父并肥州殿聖靈等奉向水、其後助教・縫殿権助等同向之、又於壇上予覚妙聖靈

向水了、

このうち傍点を付した部分が注目される。即ち、祖父師古の墓前で「列祖聖靈等」のために読経念仏がなされ、しかもこのようなことは去年から始まったという。列祖が祖父の墓を介して供養されていることは、師顯以外の諸祖の墓の一族については不明になっていることを暗に示している。恐らく流祖師元の墓もわからなくなっていたに相違あるまい。祖父の墓に拠って歴代の聖靈を回向したのは、記憶の定かな一代を通して先祖代々の系譜に結びつこうとする心意に基づいていよう。今日でも、ある一代の墓を先祖とし、その墓を以て先祖歴代を供養する方式がみられるが、すでにここにその萌芽のあることが知られる。この一例を以てとかく論ずることはできないが、少くとも中原師茂家

では十四世紀の六十年代になつてから、一墓を通して列祖聖靈に読経念仏などの所作を捧げるようになったことが明確である。このことは単墓による複數聖靈の祭祀が、複數の墓々が展開したあとにみられる各墓の個性消失後に出現していることを示唆し、墓制の上からもきわめて注目されるのである。

以上みてきたように、墓参ないし墓前で追善回向は、せいぜい曾祖父以降の聖靈に対してであり、それも益か遠忌のときに限られていたようである。遠忌以外の月忌や、三代以前の諸聖靈の忌日供養は寺院での回向にまかされていたのである。因みに後世、彼岸といへば墓参というように両者は不可分の関係にあるが、南北朝時代はまだ両者は結びついていなかった。『師守記』の彼岸記事をみても、諸寺の講会に参じたことは出ていても、墓参のことには触れてない。

また、師茂の家では貞治五年（一二三六）から、益に「列祖聖靈」を墓地で供養し始めていたこと、すでにみた通りであるが、かかる行為に大きく作用していたのは当時の祖先観であろう。単なる祖先追慕ではなく、末葉を擁護してくれるのが祖先だという觀念が、列祖を供養する行為を支えるものであった。またかかる祖先観が基底となつてこそ祖先追慕の行為が現出したともいえる。子孫擁護の祖先——このような祖先観はこの頃に濃く現われていた。

例えば、花園天皇の伏見天皇十三回忌（嘉暦四年）修福願文には「仍当先皇十三回之聖忌、跂中道唯一乘之妙行、而近日時候錯序、病瘕滿村閭、天災頻示、上下多畏怖、加之小量眇身、咳氣未散、祖母仙院、不予弥篤、云彼云此、多障多恐、若不蒙加被於祖靈者、難遂如法之經行、抑祖皇者、積法華修行之功勲、貽後葉繁昌之孫謀、妙行之加護有憑、追孝之感応無疑、然則祖靈施擁護、半座半行之勤速成」とある。追孝の感應により、祖靈の擁護があるという觀念は決して持定階層だけのものでなく、階層を超えて当時普遍的なものであった。また武藏国入間郡北浅羽にある徳治二年の浅羽小大夫有道行成塔には「七代末孫比丘慧見幹縁」、右為曩祖浅羽小大夫有道行成朝臣、其子孫等就彼故墳、奉造立也、伏願菩提樹茂近蔭後昆、本覺月朗遠照幽冥也」という銘文がある。ここでは七代の末孫慧見が曩祖の

墳墓に石塔を立て、祖先への後昆の庇護を希求しているのである。ここにもまた先祖へ寄せられた期待が子孫の擁護にあったことが示されている。では師茂兄弟がどのような先祖観をもっていたかということになるが、残念ながら『師守記』からは多くを知ることができない。しかし右にのべたような子孫擁護の祖先観を彼らもまたもっていたであろうことは確かである。師茂は「当家極官」たる「頭職」を頭惠聖霊百ヶ日中に拝任したときも、これを「依列祖之余慶」とみていた。余慶と擁護とは意味が相違するが、ともに祖先への尊崇を促すものであることにはかわりない。師茂・師守らが「列祖聖霊」のために読経念仏をしたのも、子孫擁護を念じてのことであつた。先祖は子孫を擁護することにおいて、はじめて先祖たりえるのである。このようなことの一端が盆の墓参記事に表出している。

## 五

以上、『師守記』に現われた中原家の葬祭を通して、葬祭仏教の中世における展開の様相を眺め、注目すべきことどもを指摘してきたが、さらにその墓・寺・僧の三者の相互関係についての要点に触れるならば左の通りである。

中原家には、霊山墓地と、その家が管領する樋口寺と、一族出身の尼僧と縁深い地藏堂宝持寺とがあつた。中原家の葬祭はこの両寺の住僧が管掌したが、男性聖霊は樋口寺、女性聖霊は地藏堂がとりきつていた。籠僧にも、亡者の性別に応じて、いずれかの寺の住僧になるといったように、追善寺院の持定化が判然としていた。これら持定寺院の住僧は中陰の日仏・七躰仏の世話から、石塔の造立まで取扱っていた。もちろん遠忌の仏事はこの持定寺院の住僧が、その寺を祭祀の場所として行なっていたのである。

新亡者の回向は、中陰の期間は臨終の場所を道場とし、日仏・七躰仏を本尊として行なわれ、一周忌以後は邸内の持仏堂で、形代としての御影を懸けて営まれた。とくにこの霊の依代としての御影が祀られるようになると、墓参の回数も減ってくる。曩祖や曾祖父、祖父等の遠忌は樋口寺で行なわれたが、遺族にとって最も関係の深い両親の仏事は、

月忌・遠忌ともに持仏堂で修されていたようである。持仏堂は満中陰前後から修善仏事が行なわれる場所であった。このことは『師守記』だけでなく、「加之、自孟冬之忌陰、至明年之周月、於持仏堂、致長日之勤行」という文句のみえる百箇日忌諷誦文<sup>⑧</sup>からも窺えるところである。

このようなことから、両親聖霊の如き最親縁者のための修善は持仏堂で行なわれ、曩祖をはじめ祖父母より前代の聖霊は樋口寺など管領寺院で追善回向されるというような区分が認められる。持仏堂は、つまり居住者の先代夫妻など極く近親のものをまつる邸内回向堂であった。そして世代が変り時が移るにつれ、これら聖霊の祭祀の場所のかわったさきが特定の追善寺院たるその家の管領寺院であった。

墓地は、中原家の場合、代々靈山にあったが、被葬者の判明している石塔は限られていたようである。ことに師茂・師守らの展墓の対象となった墓は祖父師古墓、先考顕惠墓、先妣顕心墓、観惠墓、観心墓などにすぎない。このうち観惠墓には師守の姉・覚妙と妻の母の遺骨が合祀されていた。また先妣顕心墓には師守の妻の遺骨が納められていた。このように女性の場合は一聖霊一墓とは限られていなかった。このようなことは石塔形態的に取扱うだけでは決してわからないことであるから、石塔研究では十分注意しなければならないことである。

また中原家歴代の石塔墓がすべて遺存していたかどうかかわからないが、祖父および曾祖父に水向けをしている記事がある<sup>⑨</sup>ことからすれば、曾祖父師顯墓もあつたようである。しかし祖父師古の墓前で「列祖聖霊等」が回向されているところから推せば、曩祖師元以下の墓は、かりに存在したとしても誰れの墓か不明に帰していたように思われる。

被葬者がわからなくなるのは、墓参も一周忌をすぎると祥月命日ぐらいとなり、祭祀が持仏堂あるいは管領寺院——中原家の場合は樋口寺など——での寺堂祭祀に移行し、墓前祭祀が絶えていくからである。墓参つまり墓前での供養が行なわれるのは、被供養者についての人びとの記憶が残っている間であつた。そして、そのような子孫に記憶のある聖霊の墓を通して、家の列祖の聖霊が供養されるという形式の祭祀が出現するのは、さきにみたように中原家の場

合で貞治五年が最初であった。従ってかかる形での列祖聖霊の供養が行なわれるようになる時期は十四世紀後半のはじめとみてよいであろう。

寺と墓とが密着していくことは歴史的推移として明白であるが、『師守記』にみられる限り、中原家の祖先祭祀においては管領寺と墓とは分離していた。一周忌までは墓前での供養が中心であった。そして、この墓前供養での稠密な時期——たとえば一周忌——のあとを受けて、寺院での祖先祭祀が比重を加えてくる。恰かも死霊浄化の段階で墓参が重視され、浄化されるにつれ寺院での祭祀が開始されるかの如くである。そして墓参が死霊の浄化のために必要であった段階で追福作善のなされた場所が、中陰中の別道場（臨終を迎えた場所）と中陰後の持仏堂であった。持仏堂はいわば邸内の管領寺院とも云うべきものであるが、この段階では機能的には管領寺院の樋口寺よりも墓所の方に密着していたのである。しかし墓前供養の稠密時期を過ぎると持仏堂は管領寺と並んで祖先祭祀の重要な場となる。管領寺院は曩祖など列祖祭祀の場であり、持仏堂はことに両親など近接する先代の聖霊祭祀に欠くことのできないものであった。持仏堂でさかんに回向された聖霊はやがて管領寺院で祀られるという点では、持仏堂は管領寺院の前段階に位置する祭祀供養場であった。この管領寺院と持仏堂を、さらには持仏堂と墓所を結びつけていたのは、もとより管領寺院の住僧であった。ここに、寺院と墓所と僧侶の三者が一体となっている室町後半期に至る前段階のものとして、管領寺院と持仏堂と墓所の三者が、葬祭を契機として、管領寺院の住僧によって相互に関連を有しあっていく様相が見出されるのである。

## 註

### ① 『師守記』貞和三年二月十二日条。同康永四年四月廿三日条。同康永四年五月廿日条など。以下特に明記しない限り『師守記』による。

### ② 康永四年二月九日条。「延慶・正和度」とは誰れの葬儀を指すか明らかでないが、「正和故禅尼」（康永四年二月十九日条）「嘉暦御事」（同年十二月条）とあり、後者が師守祖母つまり祖父師古の妻であることからみて、「延慶度」

は師古の葬儀を指すようである。

- ③ 貞和元年十一月二十八日条。
- ④ 康永四年三月十一日条、友阿諷誦文による。
- ⑤ 貞和元年十一月廿八日、同卅日条。
- ⑥ 貞和三年十一月六日条。
- ⑦ 『神道集』卷十ノ五十「諏訪縁起事」
- ⑧ 康永四年九月廿七日条。貞和元年十一月廿八日条。
- ⑨ 『栄花物語』七「鳥辺野」
- ⑩ 『行親卿記』長暦元年八月九日条。『山槐記』安元元年九月十一日条。
- ⑪ 大橋俊雄『時宗の成立と展開』二五八頁以下。
- ⑫ 康永四年二月九日条。
- ⑬ 貞和元年十一月廿八日条。
- ⑭ 赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』
- ⑮ 大橋前掲書二一一頁。
- ⑯ 康永四年四月廿六日条。
- ⑰ 例えば貞治三年二月六日、同六年八月廿三日条。
- ⑱ 康永四年五月十七日条。
- ⑲ 例えば貞和元年十一月廿九日、同三年二月五日条。
- ⑳ 例えば貞和元年十一月廿九日、同二年二月五日、同三年

二月四日条。

- ㉑ 康永四年三月廿五日条。
- ㉒ 康永四年八月廿六日条。
- ㉓ 貞和元年十月廿三日条。
- ㉔ 貞和三年三月廿三日条。
- ㉕ 貞和三年六月廿一日条。
- ㉖ 貞和五年二月六日条。
- ㉗ 貞和三年二月五日条。
- ㉘ 貞治四年五月廿日条。
- ㉙ 康永四年六月廿一日条。
- ㉚ 『統群書類従』七上、系図部。
- ㉛ 同右。
- ㉜ 康永四年七月十四日条。
- ㉝ 貞治三年七月十四日条。
- ㉞ 『本朝文集』六十九「奉為伏見天皇十三回忌修追福願文」
- ㉟ 稻村坦元『武蔵史料銘記集』三一九頁。
- ㊱ 康永四年四月十七日、同年五月二日条。
- ㊲ 『本朝文集』七十三「為先考百箇日忌修善諷誦文」
- ㊳ 貞治六年七月十四日条。